

なぎなたの持ちかえ技の左右差に関する研究

喜入みどり¹、山田理恵²、前田明²

(¹鹿屋体育大学大学院、²鹿屋体育大学)

【目的】 武道競技のなぎなたは約2.0mの長い道具を用い、繰り出し、繰り込みや持ちかえといった左右対称的な使い方に特徴がある。「持ちかえ技」とは左右いずれかの中段の構えから構えを転じ反対側から攻撃する大技であるが、近年ではこの技があまり見られず近間の踏込み技に頼りがちな傾向にある。そのため、踏込み技よりも持ちかえ技の特性と左右差を明らかにすることが必要である。本研究では、試合分析による持ちかえ技出現の実態と、3次元動作解析により持ちかえ技の左右差を明らかにすることを目的とし、以下の2つの研究を行った。**【研究Ⅰ方法】** 分析の対象は高校生77試合、大学生108試合、一般193試合、計378試合（総打突本数8,886本）とした。分析の視点は、踏込み技と持ちかえ技の発現頻度、各技の成功率とし、検討・考察した。**【研究Ⅱ方法】** 測定環境は国立大学法人鹿屋体育大学スポーツトレーニング教育センター内（運動機能測定室）とした。測定参加者は、大学女子なぎなた選手7名である。特徴は平均身長158.52±3.6cm、平均体重55.77±6.8kg、平均年齢19.71±1.0歳であった。なぎなたは、被検者7名が使用している平均的な長さ（221cm±0.07）と重さ（679g±31.4）のものを使用した。試技は、左中段・右中段から持ちかえ技（側面打突動作とすね打突動作）を各5本行った。右利きは左中段を利き手中段とした。動作はハイスピードカメラEX-F1と光学式3次元動作解析システムMAC3Dを用いて撮影した。また、床反力は多分析フォースプレートを用いて計測した。持ちかえ技動作を2局面に区分し、中段の構えから八相の構えまでの「構え時間」、八相の構えから打突部位までの「打ちおろし時間」、全局面の「打突動作時間」を利き手中段と非利き手中段で検討した。統計分析は、各測定結果をSPSS14.0（SPSS社製）を用いて、利き手中段からの打突動作時間と非利き手中段からの打突動作時間に関して、対応のあるサンプルのt検定により有意差検定を行い、危険率5%未満をもって有意差とした。**【研究Ⅰ結果および考察】** 技の発現頻度は、踏込み技が89.7%、持ちかえ技は10.3%であった。技の成功率は、踏込み技が5.7%に対し、持ちかえ技は7.7%と、持ちかえ技の成功率が高い値となった。踏込み技の発現が多い試合において、攻めに変化をつけた持ちかえ技が非常に有効であり、有効打突となることが多いと考えられる。また、左中段が76.4%、右中段が31.7%と右利きが得意とする左中段からの打突数が多い結果となった。**【研究Ⅱ結果および考察】** すね打突動作は全局面の動作時間に有意な差は認められなかったが、利き手中段の側面打突動作の打ちおろし時間(p<0.05)と打突所要時間(p<0.05)は非利き手中段よりも有意に短い値を示した。利き手中段からの操作がスムーズに行われるため、動作時間が短いものと考えられる。**【現場への提言】** 習熟の早期段階で、非利き手中段からの打突トレーニングを積極的に取り入れ、左右で得意、不得意なく持ちかえ技を用いられるように指導したい。

